

子どもの新生計画

訳 神戸中央教会有志

おおさかきょうく しんせいけいかく だ きょうかい に みな りかい
大阪教区が 新生計画を出したとき、これからの教会を担う皆さんが、よく理解できる
ぶんしょう わたし しんばい とく しょうがくせい こうがくねん みな いまきょうかい
文章か 私たちは心配でした。それで、特に 小学生の 高学年の 皆さんに、今教会で
なに お し ぶんしょう つく
何が起きているのかを知っていただくために、よりわかりやすい文章を 作ろうと
わたし かんが
私たちは考えたのです。

きょうかい えいご ご ことば しんせいけいかく ほん つく
教会は、英語、スペイン語などの言葉で 新生計画の 本を作りました。それは、より
おおく ひと あたら い かた りかい さんか ほ ねが
多くの人たちが新しい生き方を理解し、参加して欲しいと願っているからです。どうか、
みな こども しんせいけいかく ほん よ ともだち あたら い かた はな あ
皆さんもこの子どもの新生計画の 本を読んで、友達と 新しい生き方について話し合い、
きょうかい みな ひとりひとり じぶん きょうかい じっかん ほ
これからの教会は、皆さん一人一人が自分たちこそ教会だということを実感して欲しいの
いっしょ あたら きょうかい つく
です。そして、一緒に新しい教会を 作っていきましょう。

ほん おとな しんせいけいかく ぜんぶ いちばんたいせつ ぶぶん
この本は、大人の新生計画の 全部ではなく、一番大切な 部分（19ページから44
せつめい どりよく
ページまで）を、わかりやすく説明するために努力しました。もし、それでもわからなけ
みじか ひと はな あ
れば、身近な人と話し合ってください。

1997年06月13日（金曜日）

神戸中央教会有志代表 H

2 震災のときに教会は何をしたか。

きょうかい じしん はたら ふ かえ かか なか
教会は 地震のときに、どのように働いたかを振り返り、その関わりの中で、
さま はたら かんが おも
イエス様ならどう働かれたかを考えようと思います。
さいがい ひと ひと たすけ ひと であ たす あ ささ
災害にあった人たちと、その人たちを助けた人たちとの出会い、助け合い、支
あ わたし おお まな
え合いから、私たちは多くを学びました。
まな いま きょうかい か さま のぞ
その学んだことから、今こそ教会がどう変わり、イエス様が、望んでおられる
きょうかい きょうかい かんが おも
教会は、どんな教会なのかを考えたいと思います。

2-1 地震で教会はどう働いたか

じしん きょうかい はたら
教会は、地震の翌日から、この地震で困っている人々を助けたいと思い、対策本部
きょうかい じしん よくじつ じしん こま ひとびと たす おも たいさくほんぶ
をつく ちゅうしん かつどう はじ
をすぐに作りました。そしてそこを中心に、活動を始めました。
きゅうえんかつどう の みず た もの くぼ ひと かね くめん
救援活動は、飲み水や食べ物を配ったり、ボランティアの人たちやお金の工面、
じょうほう でんたつ ぜんりょく つ きゅうえん て とど ひと とく
情報の伝達に全力を 尽くしました。また、救援の 手が届きにくい人たちを、特
たいせつ かんが かつどう
に大切であると考えて、活動しました。
きょうかい ひと おなじ なかま たいせつ ひさいち ひと
教会のいろいろな人たちは、同じ仲間であることを大切にして、被災地に人やもの
でき かぎ お たす ぶじ かくにん ひつよう くぼ みす
を出来る限り送り助けました。無事であるかの確認をし、必要なものを配り、見過ご
ひと さが かが ところ た だ
されている人たちを捜したり、関わったりしました。また、いろいろな所で、炊き出

あつ ばしよ きょうかい つく

しをしたり、ボランティアの人たちの集まる場所を教会に作りました。

たかとり なかやまて すみよし きょうかい お かつどう

鷹取・中山手・住吉のそれぞれの教会に置かれたボランティアセンターでの活動や、
じしん ひと えんじよ とお おお みの
震災にあった人たちへの援助を通して、多くの実りがありました。

さいしよ つく かんが じしん

・最初は、ボランティアセンターを作ることを考えていませんでした。しかし、震災
ひと とく みす ひと ねが こた
にあった人、特に見過ごされた人たちの願いに答えようとしていくうちに、いろい
ところ きたい
ろな所から期待されるようになりました。

ちいき ひと いま いじょう なかよ きょうりょく

・地域の人たちと今まで以上に仲良くなったり、協力できました。

おお わかもん きょうかい かつどう とお ひと であ じ

・多くの若者は、教会のボランティア活動を通して、いろいろな人に出会ったり、自
ぶん なに でき はっけん なんと てつだい おと きょう
分にも何かが出来ることを発見しました。また、何度も手伝いに訪れ、すっかり教
かい ひと
会の人となりました。

がいこく き ひと にほんご ひと じょうほう つた ほう

・外国から来ている人、日本語がわからない人などにも、いろいろな情報を伝える放
そうきょく でき いま がいこく き ひと ひつよう じょうほう たいへんすく
送局が出来ました。今までは、外国から来ている人に必要な情報は 大変少なく、
わたし わすれ
私たちもそのことを忘れていました。

じしん きょうかい てつだい き きょうかい なか

・震災にあった教会と手伝いに来た教会の人たちはいっそう仲良くなりました。いろ
きょうかい ひと みす ひと みじ き たすけ
いろな教会の人たちは、見過ごされた人たちが身近にいることに気づき、助けよう
おも
と思いました。

きょうかい こ ひと きょうかい えんじよかつどう さんか

・教会に来なくなっていた人たちも、教会の 援助活動に参加するようになりました。

きょうかい つく がっこう びょういん ひとびと きょうかい ひとびと きょうりょく

・教会が作った学校や病院の 人々と 教会の 人々は協力するようになりました。

みす ひと じしんまえ かか じしん とき やく た

・見過ごされていた人たちとの地震前からの関わりは、地震の時、とても役に立ち、

ひごろ かか たいせつ

日頃の関わりが大切であることがわかりました。

じしん とき しゃかい つく ひと かか つづ しゅっぱつ

・地震の時だけではなく、よい社会を作るためにいろいろな人と関わり続ける出発
てん
点となりました。

とお いっしょ あゆ きょうかい たいせつ きょうかい すがた き

これらを通して、「みんなと一緒に歩む教会」という 大切な教会の姿に 気がつ

こわ きょうかい き たてもん ほんとう きょうかい う

きました。おみどうが壊れた教会で聞いた「建物はなくなったけど、本当の教会が生

ことば じしん あと はたら きょうかい すがた あらわ おも

まれた」という言葉は、地震の後の 働く教会の 姿を現していると思います。ま

ひと かつどう

た、たくさんの人たちは、いろいろなボランティア活動に、がんばりました。そして、

きょうかい えんじょかつどう しんぶさま とう かあ てつだ

教会の援助活動には、神父様やシスターやお父さん、お母さんもお手伝いしました。

きょうかい ひと じしん ひと がんば えんじょかつどう

教会の人だけでなく、地震にあった人たちも頑張りました。こうした、援助活動をし

ひと なか さま はたら かんじ

た人たちの中にイエス様が働いていることを感じます。

きょうかい えんじょかつどう のぞ きょうかい か いま もんだいてん

2-2 教会の援助活動からイエスさまが望まれる教会へどう変わるかー今ある問題点

わたしたち き

1 私達の 気づき

きょうかい じしんちよくご えんじょかつどう いしょうけんめい ねんげつ す なか

教会は、地震直後、 援助活動を一生懸命しました。そして、年月が過ぎる中で

み いま かつどう

はっきり見えてきたことがありました。それは、これからもずっと、今までの活動

つづ い

を続けていかなければならないと言うことです。

たとえば ひとりぐらし としよ たいせつ みす ひとたち たす
例えば、一人暮らしのお年寄りを大切にすること、見過ごされている人達を助ける
がいこく はたらき き ひとたち ささ かね こま ひとたち からだ ふ
こと、外国から働きに来ている人達を支えること、お金に困っている人達や体の不
じゆう ひとたち はたら ひとたち はたら じむしょ ばしょ
自由な人達のために働くこと、ボランティアの人達に働くための事務所などの場所を
か わたし ちいき す であう さべつ ひとたち とも い
貸すこと、私たちの地域に住む人たちと出会うこと、差別されている人達と共に生き
こどもたち げんき く はたら つづ
ること、子ども達が元気に暮らせるように働くことなどはいつも続けなければいけな
こうべ しゃかいかつどう つく
いことです。そのために、神戸で「社会活動センター」を作りました。そして、この
うご こうべ いろいろ きょうかい たいせつ
動きは、神戸だけでなく、いつも色々な教会で大切にしなければいけないことです。
いま きょうかい おお ほうしかつどう
今までも、教会では多くの奉仕活動をしてきましたが、、、

あたら

2 新しくなることをじゃましているもの

かつどう きょうかい あとまわ いま きょうかい じぶん
でも、こうした活動は、教会では後回しにされていました。今まで教会は、自分だ
かんが まわり ひと め む せいしょ かねもち せいねん
けのことを考えて、周りの人に目を向けず、ちょうど聖書の「金持ちの青年」のよう
じぶんちゆうしん どりよく せんばい
でした。そのため、自分中心で、イエスさまのようになる努力をせず、先輩づらした
ひとまかせ あたら ひと ぞんけい きょうかい みかた きょうかい み
り、ミサなどを人任せにし、新しい人を尊敬せず、教会らしくない見方を教会の 見
かた こと おお
方としてしまう事が多くあったのです。

あたら さまた むり さが あたら
新しくなることを妨げるいいわけはいっぱいあります。無理に探さなくても、新し
かんが かた う い こま ひと かか あとまわ
い考え方を受け入れなかったり、困っている人たちとの関わりをさけたり、後回しに
じかん
したりなどいろいろあります。「だってほかにすることがあるから」「でも、時間が

ないから」など、いつまでいいわけをするのでしょうか。新しい教会づくりを目指す運
どう た てん にほん き
動に足りない点もあるでしょうが、この日本のいろいろなところから聞こえてくる、

ふこうへい あらた こえ わたし みみ かたむ しんさい きゅうえん
不公平などを改めてほしいという声に私たちは耳を傾けたいのです。震災の 援助
かつどう あゆ はじ あたら きょうかい すす わたし じしん か かんが
活動で歩み始めた新しい教会づくりを進めていき、私たち自身がどう変わるかを考え
とき き
る時が来ているのです。

おおじしん たいけん ひと ところ あたた みな たが おも
あの大地震で、体験した人の心の温かさや、皆がわがままでなく、互いに思いやり
も たいけん かみ のぞ しゃかい にんげんどうし かか い
を持ちあえた体験、神の望まれる社会とはこういう人間同士が関わって生きていくと
わか たいへん きず う ことば い かな
いうことだと分かりました。大変な傷を受けたことは、言葉では言えない悲しいこと
いちじ き にんげん あたた あらわ きちよう けいけん まな す
ですが、一時の気まぐれで、人間の温かさが現れた貴重な経験から学んだことを捨て
でき ふこうへい あらた しゃかい こえ こた
てしまうようなことは出来ません。不公平などを改めてほしいという社会の声に答え
かみ のぞ しゃかい きょうかい しめ せきにん
て、神が望まれる社会とはどういうものなのかを教会は示す責任があります。これが、
あたら う か きょうかい めざ
「新しく生まれ変わろうとする教会」の目指しているものです。

3 これから どうすればよいか

にほん きょうかい かみ のぞ しゃかい すす ふこうへい あらた
日本の教会は、「神の望まれる社会を進めること」「不公平が改められること」の
めざ おおじしん はんせい かんが わたし めざ せい
2つことを目指しました。そして、大地震からの反省を考えると、私たちの目指す生
かつ かた かみさま のぞ ふこうへい しゃかい かみ のぞ ひとりひとり たいせつ
活のあり方は「神様の望まれる不公平のない社会」「神が望まれる一人一人が大切に
しゃかい つく ひとびと かか たいせつ
される社会を造っていくこと」です。つまり、「人々との関わりを大切にしながら、

い
生きること」なのです。

きょうかい い かた あたら う か せかい あ
教会は、こういう生き方をして、新しく生まれ変わりたいのです。この世界を愛し
さま したが むかし ゆめ せかい に
てくださったイエス様に従うことは、昔のことではなく、夢の世界に逃げることで
ふっかつ さま せかい あい い かた かみ
ありません。復活されたイエス様とともに、この世界を愛する生き方によって、神の

のぞ しゃかい つく
望まれる社会が造られていくのです。

さま ことば き かみ かんしゃ ひとびと なか はたら かみさま し
それは、イエス様の言葉をよく聞き、神に感謝し、人々の中に働かれる神様を知り、
きょうかい ひとびと きょうりよく わたし せいかつ ばしよ さま
教会の人々と協力して、私たちの生活している場所で、イエス様のなされたことを、
じっこう い かた きょうこうさま い せかい
実行していく生き方です。このことは、教皇様が言っていることです。つまり世界の
きょうかい あた か うんどう にほん きょうかい あゆ うごき
教会が新しく変わろうとした運動を 日本教会でも歩んでいこうとする動きです。

4 互いに協力して教会を造る大切さ

へんか しぶぶさまどうし たが きょうりよく きょうかい つく うんどう
こうした変化は、まず神父様同士が互いに協力して教会を作ろうという運動になり
たが きょうりよく きょうかい つく うご しんぶさま た
ました。この互いに協力して教会を作ろうという動きは、神父様が足りないからでは
きょうりよく あ きょうかい もっと たいせつ しんぶさま たが
なく、協力し合うことは教会が最も大切にしていることだからです。神父様も互いに
きょうりよく きょうかい つく
協力して、教会を造っていくのです。

しんぶさま きょうりよく きょうかい つく いっしょ かんが おこな はんせい
神父様たちが協力して教会を造るということは、一緒に考え、行い、反省すること
とうきょう さっぽろ うご さんこう
です。東京や札幌などほかのところでもこのような動きがありますが、それらを参考
おも だいひょうしゃ
にしてもっとよいものにしたいと思っています。代表者は、「モデラトル」といわ

せきにな わ あ しんぶさま はじめ しだい しんと
れますが、責任はみんなで分け合います。神父様だけで始めましたが、次第に信徒や
しゅうどうしゃ く
修道者も加わっていきます。

きょうかい しごと しんぶさま しんと ひと きょうりよく せきにな しん
また、教会の仕事は、神父様だけでなく、信徒の人も協力する責任があります。神
ぶさま ひとびと きょうかい もと たくさん しごと でき
父様だけでは、人々が教会に求めている沢山の仕事は、出来なくなりました。ですか
さま じだい しんと きたい しんぶさま せわ
ら、イエス様の時代のように信徒が、期待されているのです。神父様から世話される
じぶん すす かみ のぞ しゃかい つく いの はたら
のではなく、自分から進んで神の望まれる社会を作るために、祈りながら働きます。
ひとりひとり なか かみさま はた かん いっしょ ようかい つく
一人一人の中に神様が働いておられることをしっかり感じながら、一緒に教会を造っ
ていきましょう。

3. 21世紀ビジョンとしての展望

のぞ きょうかい はな はじ しんと
「キリストが望まれる教会」のことを、お話しします。初めに、信徒はどんなふ
い はな せいかつ なかま しんこう く
うに生きてらいいのかを話しましょう。生活と仲間と信仰の三つをしっかりと組み
あ い かた とも い しこうしゃ い かた
合わせた生き方ともう一つの「共に生きる信仰者」の二つの生き方です。

つぎ たすけ ひつよう ひとびと いっしょ い きょうかい たが
次に、(1)「助けを必要としている人々」と一緒に生きる教会 (2) お互い
たいせつ おも きょうかい やくわり ぶんたん きょうかい かみ のぞ
を大切に思う教会 (3) みんなが役割分担する教会 (4) 神が望まれるこ
さが あゆ きょうかい しんぶさま きょうりよく しん
とを探しながら歩いていう教会 (5) 神父様やシスターと、協力しながら、信
と せきにな も はたら きょうかい きょうかい めざ
徒が責任を持って働いていく教会の5つをこれからの教会は目指していきます。

3-1 一番大事な土台

1 「生活—仲間—信仰」の3つを 組み合わせさせて生きること

きょうかい だいじ く あ い きょうかい
 これからの教会は、3つの大事なことを組み合わせさせて生きるという教会をよくして
うんどう よろこ いたみ
 いかうとする運動をもとにしています。その3つのこととは、(1)喜びと痛みとを
かん せうかつ いま い さま であ い
 ともに感じあう生活、(2)今生きているイエス様と出会うこと、(3)生きている
さま あらわ なかま わたし せいかつ なか さま であ なか
 イエス様を現す仲間づくり、です。私たちは生活する中でイエス様と出会いながら仲
ま いしょ あゆ いしょ く あ い
 間と一緒に歩んでいます。この3つが一緒に組み合わせされていないと「生きているイ
さま わたし かんけい せいかつ きょうかい だいじ いえ
 エス様と私が関係なく生活してしまう」、「教会で大事にされていることが、家とか
がっこう わす あたら きょうかい さま
 学校では忘れてしまう」ことになってしまいます。新しい教会になることを妨げてい
く あ
 るのは、この3つの組み合わせが、うまくいっていないからなのです。

か なかま しんこう か
 そのうちのどれか、2つとも欠けるとどうなるでしょう。仲間と、信仰が欠けてし
せいかつ さま は しんこう
 まうと、生活していてもイエス様とどんどん離れてしまいます。信仰だけあっても、
なかま は し せいかつ さま であ くうそう なか せいかつ
 仲間から離れ、死んだような生活では、イエス様と出会えません。空想の中で生活し、
さま であ なかま いしょ きょうかい
 イエス様と出会うことがなければ、仲間と一緒にいてもそれは教会にはなりません。

か せいかつ わ い
 3つのうち、1つでも欠けたらどうなるでしょう。生活を忘れると生きているイエ

さま わたし かんけい せいかつ なかま
ス様と私とが、関係なく生活してしまいます。仲間がないと、ワンマンプレーになっ
てしまいます。信仰がないと、イエス様と関係がなくなります。

たいへん い かつ たいせつ めざ
どんなに大変でも、3つそろった生き方こそ、大切です。それを目指すには、ほか
ひと せいかつ かんしん も さま とも い しんこう も こわれ
の人の生活にも関心を持つこと、イエス様と共に生きる信仰を持つこと、壊れやすい
なかま むすび なかま ぜったい ひつよう
仲間づくりではなく、しっかりと結びあった仲間となることが、絶対必要なのです。

2 「共に生きる信仰者」を目指して

いま い しゃかい いちばん てん とも い わす
今わたしたちが生きている社会の一番たりない点は「共に生きることを忘れてい
る」ということです。ともに生きることをさけたり、常識や差別などから「ほかの人
ちが う い ひとり こせい みとめ おお
との違い」が受け入れられず、一人ひとりの個性が認められないことが多くあります。
また、こういう人だという決めつけも共に生きることの障害になります。また、「彼
らは～だから」と決めつければ、もうその人々の苦しみは 私には関係がないと
かんが き ひとびと くるしみ わたし かんけい
かんが よわい たちば ひとびと う だ ひと いたみ
考えてしまいます。こうしたことが弱い立場の人々を生み出し、その人たちの痛みを
かんじ しゃかい きょうだい おも ところ き す しゃかい
感じることをない社会をつくり、兄弟のように思いやる心のない切り捨ての社会がで
きてきます。

さま のぞ しゃかい とも い しんこうしゃ い
イエス様が望まれる社会をつくることは、「共に生きる信仰者」として生きること
にんげん ひと かみ かか しんこうしゃ せいちょう
です。人間はいろいろな人や神との関わりによって信仰者として成長していきます。
ひと まじ かみ まじ じぶん まじ なか じぶんじしん そだ
人との交わり、神との交わり、自分との交わりの中で自分自身を育てていきます。こ
まじ にんげん い むずか とも い しんこうしゃ

の交わりがなければ人間らしく生きることが難しくなります。「共に生きる信仰者」
ぜっこう なか はたら とも い まじ たいせつ
は絶交や仲たがいをやめるように働きかけ、共に生きながら交わっていくことを大切
きょうかい いま うんどう なか ぶんしょ
にするのです。教会の今までの運動の中でも「ともに～」というタイトルの文書がい
だ いま きょうかい かた しめ
くつか出されました。「ともに」は、今では教会のあり方を示すキーワードです。そ
い まじ い さま い
の「ともに」を生きようとすることは、交わりに生きることとなり、イエス様の生き
かた い
方を生きることにもなるのです。

まじ きず じょうたい ひつよう
交わりがないということは傷ついた状態です。そこには「いやし」が必要になりま
ひと まじ なか なお し
す。人との交わりの中でだんだん治っていくのです。この「いやし」はイエスを知っ
ひと とお おこ
ている人たちを通して行われます。

まじ よろ なぐさ しんさいご くるし わ あ きぼう
交わりには喜びと慰めがあります。震災後苦しみを分かち合うことで、希望がわい
おも きょうかい おお う か ともな いた
てきたことが思い出されます。教会が大きく生まれ変わるときに伴う痛みも、この
まじ なぐさ はげ
「交わり」によって、慰められ励まされることでしょう。

きょうかい すがた

3-2 これからの教会の姿

1 見過ごされている人々の心を生きる教会へ

きょうかい めざ みす ひとびと あとまわ
これからの教会の目指していることは、「見過ごされている人々のことを後回しに
たいせつ かんが せかいじゅう きょうかい めざ ふこう
しないで大切に考える」ことです。これは世界中の教会が目指していることで、不公
へい しゃかい じつげん じゅう たいせつ
平のない社会の実現にもつながっていきます。わたしたちは自由がどれほど大切かは
し た ひと じゅう うば ばあい じぶん つごう
よく知っていますが、他の人の自由を奪っている場合がよくあります。自分の都合の

こようじつ もち た ひと じゆう うば ひとり ひと おこな
いいような口実を用いて、他の人の自由を奪っているのです。一人の人の行いは、い
ま ひろ しゃかい そしき おお ひと じゆう うば
つの間にか広がっていき、社会ぐるみ、組織ぐるみで多くの人の自由を奪っています。
にんげん きほんてき けんり うぼう うんどう わたし
こうした人間の基本的な権利を奪うようなことをなくしていこうとする運動も、私た
さな おし おも
ちはイエス様の教えと思っています。

さま おし かみさま みす ひと まじ
イエス様の教えとは、(1) 神様は「見過ごされている人」と交わることによって、
こうふく のぞ ひとびと とも かみ のぞ しゃかい つく
わたしたちがより幸福になることを望まれ、この人々と共に神の望まれる社会を造り
だ みす ひとびと ひとり ただ
出すこと。(2) 「見過ごされている人々」とは、わたしたち一人ひとりが正しくな
たい だま てだす きず
いことに対して黙っていたり、またそれを手助けしたりしていることによって傷つけ
ひとびと き みす ひとびと しゃかい
られた人々であると気づくこと。(3) だから、「見過ごされている人々」こそ社会
ちゆうしん き
の中心にいななければいけないということに気づかされます。

みす ばしょ
またわたしたちが「見過ごす」場所の中にキリストがおられるのです。キリストの
でし ばしょ じしん い い
弟子であることは、キリストのおられる場所にわたしたち自身が行くことです。行き
い き でむか みす
なさいと言われるキリストは、来なさいと出迎えてもくださるのです。「見過ごされ
ひとびと であ まじ りょうほう ひとびと にんげん と もど
ている人々」との出会いと交わりが、両方の人々の「人間のすばらしさを取り戻し」、
よろこ う だ で かみさま のぞ
「喜び」を生み出します。それがまわりにあふれ出することは神様の望みです。

にほん きょう れきし はくがい れきし じしん みす
日本のキリスト教の歴史は、迫害の歴史であり、わたしたち自身が、「見過ごされ
ひとびと さべつ はくがい なか せんぞ あゆ だいいちじせ
た人々」だったのです。差別と迫害の中をわたしたちの先祖は歩みました。第二次世
かいたいせん とき つよ みかた ほんたい まよい
界大戦の時のように、わたしたちは強いものの味方につき、反対できなかった迷いの
なか さま おしえ おこな はんせい ひとりひとり たいせつ
中で、イエス様の教えを行えませんでした。このことを反省すると、一人一人を大切
さま おし いぜん みす ひとびと
にしたイエス様の教えのすばらしさがわかります。以前「見過ごされた人々」であっ

いま みす ひとびと みす

たわたしたちは、今見過ごされた人々を見過ごせないのです。

にほん せかい おお ひと にんげん い こんなん にん

日本でも世界でも多くの人たちが人間らしく生きることが困難になっています。人

間の基本的な権利や、命そのものが危うくなっている人々がいます。その人々が苦し

し なに かか だし

んでいるのを知っていても、何も関わろうとしないことは、キリストの弟子ではありません。

きょうかい さま おし おこな もの しゃかい たい やくわり

ません。教会は、わたしたちイエス様の教えを行う者が、社会に対してどんな役割を

も 持っているかを教皇様は詳しく説明しています。わたしたちは、苦しんでいる人と出

あ まじ ともだち いっしょ さま のぞ しゃかい つく あ どりよく
会い、交わり、友達となつて一緒にイエス様の望まれる社会を作り上げようと努力し

ています。

ちか ひと たいせつ だいじ ちか きより

近くの人を大切にすることはとても大事なことです。でも、近くとは距離ではありません。

あいて おも ところ まいにち かお あ ひと かんしん とお

ません。相手を思いやる心です。毎日顔を合わせている人でも、関心がなければ遠く

ひと ぎやく きより とお ひと かんしん も

の人になってしまいます。逆にどんなに距離が遠くの人であっても、関心を持てば、

たいせつ ひと
大切な人になります。

まいにち せいかつ はんせい なに だいじ かんが わたし くる ひと ともだち

毎日の生活を反省し、何が大事なことを考えるとき、私たちは苦しむ人の友達に

さま おし くる ひと ともだち わたし

なれるのです。イエス様の教えとは、苦しんでいる人の友達に私になることです。

まじ きょうかい

2 「交わり」の教会へ

とも い しんこうしゃ い かた もくひょう い きょうかい

「共に生きる信仰者」の生き方は、わたしたちの目標だと言いました。教会はその

じつげん めざし いま まじ

実現を目指しています。今のわたしたちの交わりはどんなふうになっているのでしょ

げんじつ たし はじ
うか。現実になんてなっているかを確認することから始めましょう。

かよ きょうかい なか なかまどうし しんぶさま しんじゃ まじ
わたしたちの通っている教会の中では、仲間同士や、神父様と信者の交わりはどう
ひと れんらく いけん こうかん

なっていますか。それぞれの人たちの連絡や意見の交換は、スムーズでしょうか。あ

せんれい う ひと あたら なかま きも う い たが
たらしく洗礼を受けた人や、新しい仲間は気持ちよく受け入れられていますか。お互

なまえ かぞく し ひと わ
いの名前や家族を知ったり、どんなことをしている人かを分かっているでしょうか。

きょうかい いの たいせつ にちよう きょうかい ちゅうしん いっしょ
教会のミサや祈りはとても大切です。日曜日のミサは教会の中心です。一緒にミサ
いの よろこ かん あ おも おおき こえ うた うた
で祈って、喜びを感じ合っていると思われませんか。大きな声で歌を歌っていますか。

よろこ へいわ さま ことば せいかつ
みんな喜んで「平和のあいさつ」をしていますか。イエス様の言葉と生活がつながっ

せつきょう おこ さま ところ うやま ところ ささ
た説教が行われていますか。イエス様を心から敬うミサ、心を一つに捧げるミサはみ

たいせつ
んなが一つになるのにとっても大切なことです。

かみさま した にんげん かか ひと
神様とだけ親しくなって、人間とは関わりたくない人もいるかもしれません。もち

い まじわ あ たい
ろんここで言う交わりとは、ベタベタつき合うことではありません。わたしたちが大
せつ まじ あいて ところ ひらく あいて かか で
切にしたい「交わり」とは、相手に心を開くこと、相手に関わっているいろいろな出

こごと かんしん も ところ あいて み はなし き はじ ひとりひとり
来事に関心を持ち、心から相手の身になって話を聞くことから始まります。一人一人

せいかつ かんしん も さま ことば ふかく し あ とも い い
の生活に関心を持ち、イエス様の言葉をもっと深く知り合い、共に生きるという生き
かた はってん ちゅうしん きょうだいしまい まじ たいけん

方にまで発展させていくのです。キリストを中心にした兄弟姉妹の交わりの体験にま
めざ わか あ きょうかい じつげん ねがって
でなることを目指します。このような「分かり合える教会」を実現したいと願ってい

ます。

まじ ほんもの なかまどうし しんこう ふか しゃかい なか い
こうした交わりが本物になり、仲間同士が信仰を深めて社会の中で生きていくとき、
きょうかい ところ こども つた し あ あいて
教会の心は子どもたちに伝わっていきます。知り合って10年にもなるのに相手のこ

なに し きょうかい はな あ
とを何も知らなかったり、教会のバザーぐらいのことしか話し合わなかったり、ほか
ひと しんぶさま ばなし しんこう はな いじ は
の人や神父様のうわさ話はするが信仰についてはほとんど話さなかったり、意地を張
あ たが おとな すがた み こどもたち せいしやうねん きょう
り合ってお互いにゆずらない大人の姿を見せつけられては、子ども達や青少年は教
かい す こども さま い ほ
会が好きになるわけがありません。子どもたちにイエス様のすばらしさを生きて欲し
おも おとな い かた はんせい と く しゅっぱつてん
いと思うなら、大人たちの生き方の反省こそ、この取り組みの出発点になるはずで
ほんとう まじ たいせつ
す。本当に交わっているかどうかが大切になってきます。

ちほう きょうかいどうし わたし くいき きょうかいどうし かんけい ひろい は
そして、いろいろな地方の教会同士、私たちがいる区域の教会同士の関係、広い範
んい きょうかいどうし かんけい かんが ひつよう じしんご かんが かた しんせい きほんほうしん
囲の教会同士の関係を考えることも必要です。地震後の考え方（新生の基本方針）の
きょうかい がっこう ようちえん びやういん しゅうどういんどうし かんけい ふか
3番目にあるように、教会の学校や幼稚園や病院また修道会同士の関係も、もっと深
たが さんけい あ たし
いものとならなければいけません。お互いが、尊敬し合ってきたのは確かですが、ま
じゅうぶん した きょうりよく はたら わたし
だ十分ではありません。もっと親しく協力して働くためにどうするか、私たちのチャ
こころ
レンジする心にかかっています。

さま だいじ ひと きょうかい どうじ ひと ひら ば
イエス様を大事にする人たちの教会は、同時にすべての人に開かれた場になってい
のぞ きょうかい であい ば まじ ば
くはずです。たくさんの方が望んでいる教会として、「出会いの場」「交わりの場」
ちいき ひと なかよ
となることは、地域の人たちと仲良くなっていくためにもしなければならないこと
す。

せかい まじ にほん がいじん しんじゃ ふ
世界の人たちとひんぱんに交わっている日本で、外国人の信者が増えていることは、
こくさいてき まじ だいじ みんぞく こ まじ まじ
国際的な交わりを大事にするチャンスであり、民族を超えて交わっていく「交わり」
ぶんか こくせき こ にんげんどうし まじ う だ たが
のモデルになるでしょう。文化や国籍を超えて人間同士が交わりを生み出し、お互い
ふか いま がいこくじんしんぶ
のきずなが深くなっていくことは、今までの外国人神父様がしてくださったことです。

まじ ね かみ あい まじ みな ちから つ まじ
 「交わり」の根っこは、神の愛の交わりです。だから皆で力を尽くして「交わりの
 きょうかい
 教会」へのチャレンジをしていきましょう。

3 「一緒に責任を果たし」共に働く教会へ

きょうかい せきにん いっしょ も とも はたら い めざ
 これからの教会は、責任と一緒に持ちながら、共に働いていこうと言うことを目指
 せきにん やくめ も はたら
 しています。責任とは、みんながそれぞれの役目を持って働いているということです。
 ちが のうりよく ひつよう
 そしてそれぞれが違う能力を持ちながら、それぞれが必要とされるメンバーであると
 さま しめ ひとりひとり たいせつ おし
 いうことです。それは、イエス様の示された、一人一人が大切であると教えてくださ
 おしえ ひとびと つた きょうりよく はたら
 ったことによるのです。この教えが人々に伝わるように、みんなで協力して働かなけ
 ればなりません。

しきょう しさい しんと ひとりひとり せきにん きょうりよく はたら せきにん
 司教も、司祭も、信徒も、一人一人に責任があり、またともに協力して働く責任も
 わたし とも はたら いっしょ せきにん は きょうどうたい めざ
 あります。私たちは共に働きながら一緒に責任を果たす共同体となることを目指して
 います。

いっしょ せきにん は きょうかい ほんもの きょうどうたい
 この一緒に責任を果たすことは、教会が本物の共同体になるためになくてはならな
 かみ のぞ しゃかい と く こども さま りかい
 いものです。神の望まれる社会への取り組み、子どもたちがイエス様をよく理解する

よわ たちば お とも い なかまどうし いっち あらわ
 こと、弱い立場に置かれている人たちと共に生きること、仲間同士の一致を表しイエ
 さま であ よろこ あ いのり おこな しんこう とお かみ
 ス様との出会いを喜び合えるミサと祈りを行うこと、信仰を通して神とのつながりを
 ふか もと しゃかい ひら きょうかい しさい しんと いっしょ なに さま
 深め求めること、社会に開かれた教会となること、司祭も信徒も一緒に何がイエス様

のぞ さが きょうかい しごと きよりよく と く せき
の望みかを探しながら教会の事に協力すること、これらのいろいろな取り組みの責
にん みな いしょ も りかい すす
任は、皆が一緒に持っていることを理解して進めましょう。

わたし くちさき じっさい い さま したが ひとり
私たちは、口先だけでなく、実際に生きることで、イエス様に従いましょう。一人
ひとり ちが かみさま あい たいせつ ひと ちが ばしょ
一人が違っていても、神様に愛されている大切な人であること、また違った場所
はたら いっしょ せきにいん は さま おし い
働いていても一緒に責任を果たすことによって、イエス様の教えを生きことができる
のです。

4 聖霊にしたがって一緒に歩む教会へ

さま かみ こ しんじ わたし かみさま つく じぶん した
イエス様を神の子と信じる私たちは、神様がすべてをお造りになり、ご自分と親し
まじ みな まねい つよ しんじ かみさま にんげん せかい は
く交わるように皆を招いていると、強く信じています。神様は人間の世界に入れ、
ひとりひとり だいじ しゃかい みちび さま こ
一人一人が大事にされる社会をつくるように導かれています。ですからイエス様の言
とば い かみさま した まじ たいせつ おお
葉を生きているわたしたちは、神様との親しい交わりを大切にします。そして多くの
せいじん せいれい せいれい い い かた のこ
の聖人たちは、聖霊によって、聖霊とともに生きる生き方をわたしたちに残してくれ
ました。その多くの聖人たちの生き方を教会の財産として、大切に生きていきたいと
わたし かんが
私たちは考えています。

かみさま のぞ さが あゆむ い かた い かた じぶんかつて
神様の望まれることを探しながら歩む生き方がわたしたちの生き方です。自分勝手
い かた かみさま みかた かんが むし
な生き方をして、神様が味方をするはずだと考えるのは虫がよすぎます。「きょう、
かみ こえ き かみ こころ と せいしよ かみさま
神の声を聴くなら、神に心を閉じてはならない」と聖書にあるように、神様がわたし

よ みみ かたむ かみ のぞ い
たちに呼びかけておられることにすなおに耳を傾け、神が望まれるように生きたいと
なが
願っています。

ひとりひとり かみさま みちびき い とも なかまどうし かみさま のぞみ さが つづ い
一人一人が神様の導きを生きると共に、仲間同士でも、神様の望みを探し続けて生
たいせつ ひとりひとり きょうかい けっつい せいれい はたら
きることが大切です。一人一人はもちろん、教会も、いろいろな決定は聖霊の働きに
き わたし しん
よって決められていくことを、私たちは信じるのです。

ざんねん わたし かみさま しんらい わすれ じょうしき かんが
しかし残念なことに、私たちは、神様への信頼を忘れ、常識だけを考えて、まわり
き み み ふ かみさま じぶん みかた おも
を気にして、見て見ぬ振りをし、神様は自分だけの味方だと思いこんでしまいます。
ひとり きょう
そんなことにならないように、わたしたち一人ひとり、またグループ、いろいろな
かい せいれい みちび い かた えら けっつい ひつよう
会で、聖霊に導かれた生き方を選ぶ決意が必要です。

わたし ねが さま その わたし おも むね
私たちの願いは、イエス様がゲッセマニの園で「私の思いではなく、あなたのみ旨
おこな い がっこう かてい じゆく ばしょ
が行われますように！」と言われたのですから、学校、家庭、塾など、どんな場所に
さま い い かた い
いてもイエス様が言われたこの生き方を生きたいのです。

せいかつ さま おも おこな じぶん せいかつ ばしょ みなおし いちど
生活を「イエス様の思い—それを行う自分の生活の場所—見直し—もう一度イエス
さま おも ところ おこな じぶん せいかつ ばしょ い く かえ
様とがんばろうと思う心—それを行う自分の生活の場所」と言ったふうに繰り返して
い もと きょうかい けっつい さま
生きていくように求められています。これからの教会の決定は、みんなでイエス様の
おも なに かんが えら き
思いは、何だろうと考え、選び、気づくことです。

さま かんが かんが ゆうき も い
そのためには、イエス様ならどう考えるかといつも考え、勇気を持って生きていく
くんれん ひつよう さま おし ふか し ひとり はんだん
訓練が必要です。イエス様の教えを深く知り、一人ひとりが判断できるようになるこ
たいせつ おこな むずか さま ひとりひとり たいせつ くだ
とが大切です。行うことは難しいですが、イエス様が一人一人を大切に下さって
しんらい ところ と あゆ
いることを信頼し、そのことを心に留め歩んでいきましょう。

しんぶさま きょうりよく
5 神父様、シスターと協力しながら、
わたし とも せごにん は きょうかい
私たちが共に責任を果たしていく教会へ

わたし ひと とも かみさま のぞ しゃかい
私たちは、いろいろな人たちと共に神様の望まれる社会をつくっていくとき、イエ
さま でし はたら なか さま み ひとびと たす
様の弟子となります。またその働きの中にイエス様を見ることができ、人々の助け
さま おし わたし せいかつ い
となることができます。また、イエス様の教えが私たちの生活のなかで活かされるこ
わたしたち たいせつ かみさま おも た ひとびと つた
とによって、私達を大切にしてくださる神様の思いが他の人々にも伝えられていくこ
わたし せいかつ さま ところ あらわ
とになります。ですから私たちの生活そのものが、イエス様の心を現わすものとなる
ことです。

きょうこうさま せいじ しゃかい かか い
また教皇様は政治や社会のことにも関わっていくようにとされています。たとえ
じゅう せいぎ じつげん よわ ちから あつ しあわ はたら
ば、自由と正義の実現、弱い力を集めること、みんなの幸せのために働くこと、ぜい
く まず ひと よわ たちば ひと だいじ ぼうりよく
たくでない暮らし、貧しい人や弱い立場の人をまず大事にすることなどです。暴力や
せんそう いけん ちが ひと たい ぼうりよく ひろ きょうせいてき せまい ぼしょ と
戦争、意見が違う人に対する暴力、じゃまになる人を強制的に狭い場所に閉じこめる
せんそう みちびく こうい ぶき かず かくへいき むかんしん
こと、戦争へと導く行為、武器の数や核兵器でおどすことなどに、無関心であった
し ぎやく さま でし へいわ しゃかい じつ
り、知らないふりをしてはなりません。逆にイエス様の弟子として、平和な社会を実
げん こうどう へいわ びょうどう しゃかい じつげん わたし せいかつ
現するために行動することです。平和で平等な社会の実現は、私たちの生活のなかか
はじ がっこう さべつ な
ら始まるのです。学校のいじめや差別やきめつけなどのいやなことが、どれほど無く
がいこく はたら き ひと さべつ な
なっているのでしょうか？外国から働きに来た人たちへの差別が無くなっているでしょ

しんけん と く

うか。まだまだ真剣に取り組まなければならないことがたくさんあります。

さま したがう わたしたち しゃかい なか い

さま おし

イエス様に従う私達が社会の中で生きていくためには、しっかりとイエス様の教え

ところ と たいせつ みわ くんれん ひつよう きょうこうさま い

を心に留め、大切なものを見分ける訓練が必要だと教皇様は言っておられます。それ

しぶさま

たよ

ひとり

じぶん のうりよく い

によって神父様やシスターたちに頼るのではなく、一人ひとりが自分の能力を生かし

さま のぞ しゃかい つく きょうりよく

てイエス様の望まれる社会を作るために協力できるのです。

きょうかい わりいじよう し しんと わり み しい しゅうどうしゃ

これからの教会は9割以上を占める信徒が1割にも満たない司祭、修道者にいつま

たよ

きょかい

にちようがっこう てつだ

でも頼っていいはずがありません。教会のいろいろなことや日曜学校の手伝い、ミサ

じゅんぴ

いそが

しんぶさま

てつだい

はたら

きょうかい つく

の準備など忙しい神父様のお手伝いとしての働きから、わたしたちこそが教会を作っ

ほんらい しんと ちからづよ おもい ひつよう

ていくのだという本来の信徒の力強い思いが必要です。

ちい

ひとびと う だ

むし

き す

しゃかい

かた た

これからは小さくされた人々を生み出し、無視し、切り捨てる社会のあり方に立ち

む

もと

いま

こじん ぜんい

たよ

向かっていくことが求められています。今までは、個人の善意に頼っていたことを、

おおぜい

ひと

かか

おお ちから

ひろ

ひつよう

ちいき ひとびと

これからは大勢の人が関わり、大きな力となって広げする必要があります。地域の人々

きょうりよくかんけい

さま したが

きょうりようかんけい

いっぽ

ひと

との協力関係、イエス様に従う人たちとの協力関係も、一歩ずつ広げていきましょう。

ちい

きょうかい

へいわ

せいかつ

しゃかい

なか

てだす

ひつよう

ひと

とも

小さな教会だけの平和な生活から、社会の中で手助けが必要としている人たちと共

あゆ

で

に歩いていくために出かけていくのです。

きょうかい なか

わたし

ちゅうしん

かつどう

しんぶさま

きょうりよく

そして教会の中でも、私たちが中心に活動をし、神父様シスターの協力を得ながら、

しゃかい む

ひと

たいせつ

かみ

のぞん

つた

社会に向かって「すべての人が大切にされることを神が望んでいること」を伝えてい

くのです。

きょうかい あ ふ かえ すす すがた
これまで、教会が歩んできたことを振り返り、これから進んでいこうとする姿をお
はな きょうかい いま さま
話してきました。このような教会になっていくために、今までのイエス様のとらえか
みなお やくわり かつどう き かた あたら わたし じしん い かた ちか
たの見直し、役割や活動の決め方を新しくし、私たち自身がイエスさまの生き方に近
せいちょう ひつよう さま か はじ
づくように成長することが必要です。イエス様のとらえかたが変わることによって初
やくわり かつどう き かた か さま い かた ちか
めて、役割や活動の決め方が変わります。だからイエス様の生き方に近づかなければ、
かつどう かた か いみ さま おこな ふ ひと
活動のやり方を変えてみても意味がありません。イエス様の行いにじかに触れた人た
あつい おも わたしたち よ お
ちの熱い思いを、 私達のうちにも呼び起こすのです。

わたし かみさま よ さま つか ひと
私たちは神様から呼ばれたのですから、イエス様が「しもべのように仕える人」に
おな い かた せいちょう ひつよう
なられたのと同じような生き方ができるように成長する必要があります。

きかい い ひとり に きょうかい
いろいろな機会を活かして、一人ひとりがキリストに似たものとなるように教会も
ささ
それを支えていきたいのです。

しんぶさま どうよう ひとびと ひび まじ なか にんげん するど かんじゆせい そだ
神父様も同様に、人々との日々の交わりの中で、人間としてより鋭い感受性を育て、
ひとびと もとめ りかい こた どりよく

人々が求めていることを理解し、それに応えていくように努力しなければなりません。

わたし せいかつ なか きぼう きぼう よろこ くる わ あ しんぶさま
私たちの生活の中での希望、期待、喜び、苦しみを分かち合うためです。神父様もい

せいちょう しゃかい なか
くつになっても成長することおこたってはならないのです。そして社会の中でしっか
げんじつ み ひとびと あゆ しんぶ もと
り現実を見つめて人々と歩む神父様になることが求められています。

わたし あたら う か い かた ほんき こんなん
私たちが「新しく生まれ変わる生き方」を本気になってするなら、どんな困難にぶ

かみ なぐさ きぼう う こども う
つかっても神からの慰めや希望を失うことはありません。子どもが産まれてくるとき

ははおや くる くる たし よろこ か きょうかい
には母親は苦しむものです。しかしその苦しみは確かに喜びに変わります。教会の
れきし なか きょうかい か いけん

歴史の中で教会は変わらなくてもよいという意見がありました、よりよくなろうと
かつどう だい こうかいぎ う めぐ
いう活動（第2バチカン公会議）が生まれてきたことは、恵みというほかはありません。
あたらし うご なか いけん たいりつ だいせつ
。「新しくなろうという動き」の中で、意見の対立や、大切にすることにズレがあ
ふしぎ ちが の こ かみ みちび
るのは不思議なことではありません。そういった違いを乗り越えて、神が導いておら
しんじ いっぽ あゆ
れることを信じて一歩ずつ歩んでいこうとしているのです。

しきょう しんぶさま しんと いま はな きょうかい
司教様、神父様、シスターも信徒も、今までお話ししたような教会になるために、
とも かんが いの あゆ かみ のぞ
共に考え、祈りあい、歩んでいくことを、神はお望みなのです。

しゆ かみさま えいこう ちち ちえ あ
「どうか主イエス・キリストの神様、すなわち栄光の父が、あなたがたに知恵を与
さま かた なに ただ
えて、キリスト様がどのようなお方か、また何をしてくださったかを、正しく、
りかい ところ ひかり あた
はっきりと理解させてくださいますように。また、心にあふれるほどの光が与え
かみ め あた しょうらい み
られて、神様が、あなたがた召して与えようとされる将来を、はっきり見きわめ
さま わたし かみさま
ることができますように。そして、キリスト様のものとして、私たちが神様にさ
けっか かみさま ゆたか あき し
さげられた結果、神様の豊かさがいっそう明らかになったことも、知ってほしい
しんじ もの たす かみ ちから しん ぜっだい
のです。また信じる者を助ける神様の力が、信じられないほど絶大であることを、
りかい い
理解してくれるようにと祈っています。」

てがみ しょう せつ せつ
(エフェソへの手紙1章17節から19節)

しゆ わたし い き い
主よ、私たちの祈りを聞き入れてください！

おわり